増え続ける男

田渕靖章

登場人物

増田一郎	(22)	大学生
大林義弘	(22)	一郎の友人
西川隆史	(21)	一郎の友人
増田和夫	(55)	一郎の父
増田末子	(50)	一郎の母
坂田勝則	(22)	一郎の地元の友人
滝口和弘	(21)	一郎の地元の友人
沢村誠二	(21)	一郎の地元の友人
赤穂惇	(23)	暴走族のリーダー
大西正明	(58)	和夫の知り合い
辰巳正雄	(37)	赤穂の面倒見
宮路健四郎	(44)	辰巳の知り合い
中西勇雄	(55)	オカルト本の著者
西川修三	(52)	西川の父
西川数子	(48)	西川の母親
塚本先輩	(24)	赤穂の先輩
仲間A～C		赤穂の仲間

○増田家・台所（朝）

増田一郎(22)が２人、並んで座っている。

増田末子(50)、やって来ると、一郎を見て立ち止まる。

末子「あれ？一郎が２人……」

一郎「朝起きたら俺がもう１人いたんや」

増田和夫(55)、やって来ると、一郎達を見て呆然とする。

和夫「どっ、どうなってるんだ……」

と、末子と顔を見合わせる。

○増田家の屋根（朝）

晴れ渡った住宅地が見える。

○増田家の台所（朝）

一郎２人、パンを食べている。

和夫、末子、正面に座っている。

和夫「じゃあ、何も変わった事はなかったんだな？」

一郎「いつも通りや。目が覚めたらもう1人いたんや」
和夫「一体、何が起こってるんだ……」
末子「どっちが本物の一郎なの？」
一郎「多分、俺の方やわ」
一郎２「多分そうやわ」
和夫「何が本物と偽物を分けてるんだ？」
一郎「俺はいつもベッドで寝てるねん」
一郎２「そうやねん。でも俺は起きたら押入れの中で三角座りしててん」
和夫、一郎を指差す。
和夫「じゃあ、こっちが本物の一郎で」
と、一郎２を指さす。
和夫「こっちが偽物の一郎？」
一郎２「そうやろうな」
一郎「そうやろうな」
末子、その場を離れ、ミルクを入れたコップを持って戻って来る。
一郎の前に、無印のコップを置く。
一郎２の前に、１と大きく書かれたコ

ップを置く。
一郎２「俺は一郎じゃないで」
末子「え？」
一郎「俺が一郎や」
一郎２「それで俺が偽物のゴミクズや」
と、目の前の１と書かれたコップを一郎の方へと動かす。
一郎、目の前の無印のコップを一郎２の方へと動かす。
和夫、一郎２の方を見る。
和夫「一つ聞きたいんだけど、記憶はあるか？例えば、お姉ちゃんの事とか」
一郎２「あの妖怪鬼クソババアやろ」
末子「そのまま一郎だわ……」
と、呆然と呆れて顔を振る。

○増田家・玄関（朝）
カバンを持った一郎、靴を履くと、扉を開けて出て行く。

○増田家・リビング（朝）

一郎２、ソファーに座っている。

末子、その背後の台所で、片づけをしている。

○大学・図書室

一郎、座って本を読んでいる。

大林義弘（２２）、一郎の元にやって来ると、後ろから本を覗き込む。

生物学の本が広げられている。

大林「なんでそんなの読んでるの？」

一郎「人間が増える現象を調べてるんや」

大林「そういうのは社会学じゃないの？」

一郎「人口が増える問題じゃないねん。同じ人間が増える現象や」

大林「クローンとか？」

一郎「自然に増えていく方や」

大林、笑う。

大林「それオカルトでしょ」

一郎、ため息を吐く。

一郎「お前に今の俺の状況は解らんやろうな」
と、再び本を読み始める。

○増田家・外観（夜）
窓から光が漏れている。

○増田家・台所（夜）
一郎、一郎２、和夫、末子、テーブルを囲んで食事をしている。

末子「今日はどこで寝るの？」
一郎２「偽物は大人しく外の物置で寝るわ」
末子「そんな事できないわよ」
和夫「お姉ちゃんの部屋が空いてるから、そこを使えばいいじゃないか」
一郎２、箸を丁寧に置いてから、大きなため息を吐く。
一郎２「あの妖怪鬼クソババアの中古部屋か」
末子「何て事言うの⁉」
一郎、笑う。

一郎「ホンマその通りやわ」
末子、呆れて顔を振る。

○増田家２階の廊下（夜）
一郎、一郎２、階段をのぼって来る。
一郎、奥の部屋の扉を開けて中に入る。
一郎２、手前の部屋の扉を開けて中に入る。

○増田家・台所（朝）
一郎が３人、座っている。
和夫、呆然と一郎達を見て立っている。
和夫「また１人……増えたのか……」
一郎「昨日と同じやったわ」
和夫「そう……か……」
一郎２、一郎３を見る。
一郎２「お前も気づいたら三角座りか？」
一郎３「そうや。お前もそうやったんか？」
一郎２「そうや」
と、納得するように一郎３と頷き合う。

○大学・学生食堂

学生達が賑やかに食事をしている。

一郎、大林、向かい合って食事をしている。

大林「一っちゃんが３人に増えた？」

と、嬉しそうな表情を浮かべる。

一郎「ほら見てみい。その顔は信じてない顔や」

大林「そりゃ信じられないでしょ。会わせてくれたら信じるけど。てか会いたいし」

一郎「俺全員に食事をおごってくれるなら会わせたるで」

大林「全員におごるよ。１人最高２千円まで出すから会わせてよ」

一郎「よっしゃ会わせたるわ」

大林「じゃあ来週の土曜日か日曜日に西川も連れて食べに行こう」

一郎「俺はいつでもええで」

と、ニヤリと得意げな表情を浮かべる。

○増田家・外観（夕方）

オレンジ色の夕日に照らされている。

市のスピーカーから、街中に夕焼け小焼けの音楽が外に流れている。

一郎、歩いて来ると、家の扉を開けて入って行く。

○一郎の部屋（夜）

一郎、ベッドの上で眠っている。

○増田家の台所（朝）

一郎が５人座っている。

和夫、座る場所がなく立っている。

末子、流しの前に立っている。

和夫「ずいぶん賑やかになったなー」

一郎「ホンマ世の中謎だらけやわ」

一郎３「目が覚めたら三角座りか？」

一郎５「そうやねん」

一郎２「みんなそれやな。あっ、一郎は違うわ。俺ら４人が三角座りや」

和夫「で、今日はどの一郎が増えたんだ？」
一郎５、手を上げる。
一郎５「俺や」
和夫「ああ、そうか」
末子「一郎、一郎はこのまま増え続けるの？」
一郎「俺には解らんわ」
一郎３「今の感じやと、また明日も増えるんとちゃうか」
末子、不安そうな表情を浮かべる。
末子「でも、このままだと一郎が入りきらなくなるわ」
和夫「何か手を打たないとな」
と、両腕を組んで黙って考える。
和夫「そうだ。お前らお父さんの会社で働け」
末子「あなたの会社で？」
和夫「そこなら寮付きで給料も出せる」
一郎２「そらええわ」
一郎５「ええわー」
一郎２「前から１人で暮らしをしてみたかったんや」

一郎５「あんな妖怪の中古部屋なんて小汚いだけやもんな」
末子「またお姉ちゃんに酷い事を言って」
と、呆れた表情を浮かべる。

○大学・学生食堂
一郎、大林、西川隆史（２１）、テーブルを囲んでいる。
西川「焼肉食べ放題いいねー」
一郎「１人２３００円やねんけど、大丈夫か？」
大林「いいよ。本当に一っちゃんが何人もいたらね」
西川「一っちゃん何人で来るつもり？」
一郎「来週の日曜なら、えーと……」
と、視線を右上に向ける。
西川「今、何人いるの？」
一郎「今で５人や」
大林、西川、吹き出すように笑いだす。

○増田家外観（夜）
２階の窓の電気が消える。

○増田家・台所（朝）
末子、立って牛乳を飲んでいる。
一郎５人、座って食事をしている。
その先に見えるリビングに一郎３人、
座って食事をしている。
和夫の声「よーし、そろそろ行くぞー」
和夫、やって来て台所を覗く。

○増田家の前（朝）
白い高級車、止まっている。
和夫、一郎４人、家から出て来て、車
に乗り込む。
白い高級車、ゆっくりと走り去る。

○白い高級車の車内（朝）
和夫、運転している。
一郎４人、助手席と後部座席に黙って

座っている。

○６階建ての寮の前（朝）

白い高級車、やって来ると停車する。

和夫、一郎４人、車から降りて、寮の中へと入って行く。

○増田家・リビング（朝）

一郎３人、末子、寛いでいる。

玄関の扉の開く音がする。

末子「あっ、お父さん戻って来たわね」

和夫、部屋を覗きこむように顔を出す。

和夫「さあ、残りの一郎も行くぞー」

一郎６、立ち上がる。

末子「じゃあ、気をつけてね」

一郎６、無言で部屋から出て行く。

○増田家の前（朝）

停車している白い高級車、走り出す。

○増田家・リビング

末子、電卓を使って計算をしている。

和夫、部屋に入って来る。

和夫「ただいまー」

末子「おかえりなさい。どうだった？」

和夫、末子の前に座る。

和夫「みんな気に入ってくれたよ」

末子「良かった」

和夫「ん？何してるの？」

末子「お金の計算なんだけど、来月の携帯電話代がいくらになるか心配なの」

和夫「最初だけだよ。一郎達は給料が入ったら自分の分は自分で払うってさ」

末子「あーそう。助かるわー」

和夫「それも、稼いだ給料の一部を家に入れてくれるんだってさ」

末子「口は悪いけどいい子ねー。これからは私達が一郎達に助けられそね」

和夫「みんな一郎だからね。将来は社長も部長も社員も、みんな一郎にしたいよ」

末子「お父さんの方が子供だったりしてね」
和夫「男の夢はそれぐらい大きくないと」
と、嬉しそうに窓の外を見る。

○神社・拝殿前（夕方）
和夫、鈴を鳴らす。手を２度叩いて合わせ、目をつむって祈る。
数秒経過すると、目を開ける。
和夫「よし」
と、その場から離れて行く。

○増田家・台所（朝）
一郎が４人、食事をしている。
末子、一郎４人を見ながら、腕を組んで立っている。
末子「１日１人増えると、本当早いわねー」
一郎９「この調子でいけば、明日には一郎が２桁の大台に乗るで」
と、得意げな表情を浮かべる。

○大学・キャンパス

大林、一郎、ベンチに座っている。

一郎「焼肉の話やけど、今週の日曜日の夕方でええか？」

大林「いいよ」

一郎「忘れるなよ。約束を」

大林「解ってるって。それまで一っちゃんもその話題、忘れないでよ」

一郎、不敵な笑みを浮かべる。

○大学・トイレ

人がいない。個室の扉が一つだけ閉まっている。

一郎の声「あの、予約をしたいんです。今週の日曜日の夕方５時からで。はい。大林義弘です。はい。１７名でお願いします。はい。お願いします」

トイレの水が流れる音が響き渡る。

一郎、扉を開けて出て来ると、手を洗わずにトイレから出て行く。

○増田家・台所（夜）

一郎４人、和夫、テーブルを囲んで食事をしている。

末子、横に立っている。

末子「計算したら、日曜日に家にいる一郎が１０人になるのよ」

和夫「じゃあ日曜日に寮に連れて行くか」

一郎「土曜日に連れて行ってくれへんか」

和夫「何かあるのか？」

一郎「日曜日は友達と俺全員で食事に行きたいねん」

末子「今月は一郎が増えてお金を沢山使ってるから、来月にできない？」

一郎「大林がおごってくれるねん」

末子「ああそう。大林君が」

和夫「おいおい、その友達、お金大丈夫か？一郎は１人じゃないんだぞ？」

末子「大林君なら大丈夫よ。家が美容整形外科の開業医なの。で、学生なのに高級車に乗ってるの」

和夫「へー。すごいね。なら大丈夫だ」
と、感心する。

○国道（夕方）
高級車、走っている。

○高級車の車内（夕方）
大林、運転している。
西川、助手席に座っている。

西川「ここからどれぐらいかかるの？」
大林「焼き肉屋までは３０分くらい」
西川「間に合わなくない？一っちゃん迎えに行ってからだと１時間以上はかかるよ」
大林「一っちゃんとは焼肉屋で待ち合わせ」
西川「あれ？あの焼肉屋って一ちゃんの家から結構遠いでしょ？」
大林「なんか迎えに行くって言ったら、この車じゃ入りきらないんだってさ」
と、西川と笑う。

○焼肉店の前（夕方）
大林、西川、待っている。
西川「一っちゃん遅いなー」
大林「ちょっと電話してみるね」
と、その場から離れて行く。
客が西川の横を通り過ぎて店の中に入って行く。
大林、しばらくすると戻って来る。
大林「もう着くから先に入っといてだって」
と、西川と店の中に入る。

○バス停（夕方）
バスが停車する。
音を立てて扉が開く。

○焼肉屋・店内（夕方）
周囲の席には客が埋まっている。
大林、西川、店員に案内されて誰も座っていない大人数用の席に座る。
西川「なんで俺達だけこんな広いテーブルな

の？」

と、大林と顔を合わせる。

大林「なんでだろう。あっ⁉」

と、ポケットからスマートフォンを取り出し耳に当てる。

大林「もしもし？うん。入り口入った所にいるよ。うん。待ってるね」

と、スマートフォンを耳から離す。

西川「一っちゃん？」

大林「もうそこまで来てるって」

西川、受付の方を見る。

西川「あっ、一っちゃん来た」

大林、一郎の方を見る。

一郎、受付で店員と話すと、テーブルの方へ歩き出す。その後ろから、一郎１４人、ついて来る。

大林、西川、大きく目と口を開けて呆然とする。

一郎、目の前にやって来る。

一郎「待たせたな」

と、一郎１４人と席に座る。
周囲の客達、一郎達をチラチラ見る。

○焼肉屋の外（夜）
店の窓から、大林、西川、１５人の一郎達が並んで焼肉を食べているのが見える。

○焼肉屋・店内（夜）
一郎１５人、大林、西川、焼き肉を食べている。

一郎２「それにしても久しぶりやな」
西川「え？おととい学校で会ったじゃん」
一郎２「それは一郎とやろ。俺は２週間くらい会ってないで」
一郎、焼肉を焼く。
一郎「みんな生活はどうや？」
一郎３「まあ悪くはないわ」
一郎５「部屋も静かでなかなかやわ」
一郎「そらええな」

一郎１２「明日から俺もがんばるわ」
大林「いっ、一っちゃん何をやってるの？」
一郎３「俺らは親の会社で働いてんねん」
一郎５「数が増えて家に入りきらへんから、
会社の寮に住んで働くねん」
大林「あっ、ああー、あっ、あそうー」
と、呆然と焼き肉を口に入れる。

○焼肉屋・レジの前（夜）
大林、西川、やって来る。
店員、レジを打つ。
店員「お会計４万２千２２８円になります」
西川、驚いたように大林を見る。
大林「大丈夫。心配しないで」
と、財布からカードを取り出し、店員
に渡す。

○焼肉屋の外（夜）
店の扉が開くと、大林、西川、一郎１
５人の順番に出てくる。

並んでいる客達、一郎達を見て驚き、呆然と顔で追いかける。

○焼肉屋の駐車場（夜）

大林、西川、一郎、高級車に乗り込む。

高級車、その場から走り去る。

○焼肉屋の前の道路（夜）

高級車、焼き肉屋の駐車場から出て来ると、道路を走り去って行く。

一郎１４人、少しすると、焼き肉屋の敷地から出て来て、歩道を歩いて行く。

○バス停（夜）

一郎６人の列の間に、おばあさんがいて、その後ろに一郎８人が並んでいる。

○大学の図書室（朝）

大林、座って生物学の本を読んでいる。

西川、オカルト本を片手に大林の元に

やって来る。
西川「おい、大林」
と、大林の目の前にその本を広げ、顔が馬で体が人間の絵を指さす。
西川「これだって」
大林、笑い出す。
西川「笑ってる場合じゃないって」
大林「でもこれ化け物じゃん。何の関連があるの？」
西川、その本のページをめくる。
西川「ここ見てみろよ。その化け物が、彼らを増殖させて送り込むって」
大林「それオカルト本でしょ」
西川、ムッとしたように口を尖らせる。

○大学・学生食堂
大林、西川、座っている。
大林「さっき電話で一っちゃんに聞いたら、今日も1人増えたんだって」
西川「やっぱり……」

大林「毎日押し入れから出てくるらしいよ」
西川「そうか、外敵から守られて、温度と湿度がちょうどいいんだ」
大林「またあのオカルト本？」
西川「生物学の本より信用できるって」
大林「じゃあなんて書いてたの？」
西川「地底人のプリリンが」
大林、噴出すように笑う。
西川、ムっとしたように大林をじっと見たまま一度黙る。
大林の笑いが収まる。
西川「地上を支配しようとして……」
大林「そんなの全部嘘だよ」
西川、不満そうに黙り込む。
大林、そんな西川を見ながら顔を振る。

○大学・教室４２３号室
一郎、座っている。
大林、その隣にやって来て座る。
一郎「おお、お前か」

大林「色々調べたんだけど、さっぱりだよ」
一郎「そらそうやろう」
大林「でさ、考えたんだけど、一っちゃん、
　１度病院に行ってみない？」
一郎「何でや？」
大林「一っちゃん今日で何人になった？」
一郎「１７人や」
大林「おかしいと思わない？２週間前までは
　一っちゃんは１人だったんだよ」
一郎「２週間前は３人や」
大林「あっ、そうか……。でっ、でも、一っ
　ちゃんは増え続けてるし、どれが一っちゃ
　んかも解らない状態じゃん」
　　一郎、大林を疑うように目を細める。
一郎「そういう事か」
大林「そういう事？」
一郎「俺も前から言おうと思ってた事やけど
　な、病院はお前が行くべきや」
大林「え⁉なんで俺が？」
一郎「俺が増えて顔の区別がつかんからって。

整形で見分けようとする考えが美容整形外科の息子らしいわ」
大林「いやっ、そういう意味じゃなくて」
一郎「そんな事言い出したら、この前一緒に競馬に行った時、俺はお前と馬の区別がつかんかったぞ。それを先に治すべきや」
大林「違うんだって」
　教授、扉を開けて教室に入って来る。
一郎「ほら見てみい。お前が整形の卑怯な宣伝をするから、いつもより早く川森が来てしまったやんけ」
　教室が静かになる。

○大学・キャンパス
　大林、西川、ベンチに座っている。
西川「それで一っちゃんはなんて？」
大林「注射が嫌なんだってさ。だからどんな病気になっても、病院には行かないって」
　西川、深刻な表情を浮かべる。
西川「もしかして……」

大林「またオカルト？」
西川「違うって」
大林「じゃあ何？」
西川「レントゲンを警戒してるのかも」
大林「ほらオカルト本じゃん！」
と、少し怒って飽きれるように目をそらす。

○増田家の台所（夜）
一郎３人、和夫、テーブルを囲んで食事をしている。
和夫「一郎はみんなよく働いてくれるよ」
一郎「ほんま俺はマジメやな」
和夫「本当にマジメだよ。でも給料がねー」
末子、テーブルの元にやって来る。
末子「給料って、あの会社ならいくらでも払えるでしょ？」
和夫「身分証明の問題なんだ。戸籍上、一郎は１人だからね」
末子「じゃあどうするの？」

和夫、腕を組んで硬い表情を浮かべる。

和夫「とりあえず大西さんに当たってみるよ」

末子「あー、あの人ね。でも法律に触れて逮捕されるなんて事にはならない？」

和夫「それも含めて相談してみる」

インターフォンが鳴る。

○増田家の前（夜）

ミニバンが停車している。

一郎、家の扉から出て来る。

小柄な坂田勝則（２２）、助手席の窓を開ける。

坂田「一っちゃんオッス！」

と、手を挙げる。

一郎「おー、お前か」

と、後部座席に乗り込む。

○ミニバンの車内（夜）

沢村誠二（２１）、運転している。

坂田、助手席に座っている、
一郎、滝口和弘（２１）、後部座席に座っている。
坂田「久しぶりにこのメンバーで集まったな」
沢村「あー、確かに」
坂田「滝口は中学以来、一っちゃんとは一回も会ってないだろ？」
滝口「会ってないね」
坂田「ちゃんと覚えてるか？」
滝口「そりゃ覚えてるよ」
坂田「一っちゃんは滝口覚えてるか？」
一郎「よう朝に黒いジャージ着て校門の前に立っとったヤツや」
滝口「それ俺じゃなくて国語の先生だし！」
坂田、滝口、沢村、笑う。
坂田「やるね一っちゃん！」
滝口「一っちゃんそんな性格だったっけ？」
沢村「昔はもっと大人しかったよね」
坂田「一っちゃんは昔とは全然違うんだよ。沢村、コンビニ行って！」

○コンビニエンスストアの駐車場（夜）
ミニバン、やって来ると駐車する。
坂田、助手席から降りて店に入る。

○ミニバンの車内（夜）
沢村、運転席に座っている。
滝口、一郎、後部座席に座っている。
一郎「あいつ、小便や言うてたけどウンコやな」
滝口、沢村、笑う。
滝口「一っちゃん本当、昔と全然違うし。それに関西弁になってるよね」
沢村「関西の方に転向したのって小学３年生の時？」
一郎「そうや」
沢村「それで中学１年で戻って来たよね」
滝口「あれ？その後だよね？俺達知り合ったの？」
一郎「そうや」
滝口「その時は関西弁じゃなかったのに、な

んで関西弁になったの？」

一郎「高校２年から自然とそうなってもうたんや」

滝口、沢村、笑う。

滝口「そっか。そこから一っちゃん変わったんだ」

沢村、窓の外を見る。

沢村「あっ、戻って来た」

坂田、扉を開けて助手席に戻って来る。険しい顔をして腕をめくり、窓の外に腕の筋肉を見せつける。

坂田「っしゃコラー！」

と、腕に力を入れて振動させる。

沢村、滝口、不思議そうに坂田を見る。

赤穂惇（２３）、車の方へと近づいて来て、窓の外から坂田を睨みつける。

坂田、同じように赤穂を睨みつけると、扉を開けて車を降りる。

坂田と赤穂、睨み合う。

赤穂「んだコラ、てめえ舐めてんのか」

坂田「あー？なんだコラ！」
と、睨みつけたまま顔を上下させる。
赤穂「てめえどこのチームだ？」
坂田「あっ？てめえがどこだコラ？」
ギャル２人、コンビニの前で不安そうにその光景を見ている。
赤穂「お前どこのチームだよ」
と、坂田に一歩近づく。
坂田、赤穂に一歩近づくと、ポケットからスマートフォンが落ちる。その音をかき消すように、大きな声を出す。
坂田「（大きな声）あー！なんだてめえこの野朗！」
赤穂「（大きな声）あー⁉」
滝口「坂田行こう行こう」
坂田、睨み合いながらも、助手席に戻り、扉を閉める。
窓から赤穂と睨み合う。
車が発進すると、赤穂の姿が横切って消える。

○コンビニエンスストアの駐車場（夜）
ミニバン、道路に出て行き、走り去って行く。
赤穂、走り去る車を睨みつけている。
その足元には、坂田のスマートフォンが落ちている。

○ミニバンの車内（夜）
沢村、運転している。
坂田、助手席に座っている。
一郎、滝口、後部座席に座っている。
滝口「何があったの？」
坂田「店に入る時に目が合ったんだよ。そしたら睨みつけてきた」
滝口「なんかチームとか言ってたよね」
沢村「もしかしたらー、暴走族とかかも？」
滝口「坂田どっかのチームに入ってるの？」
坂田「そんなの入ってねえよ」
一郎「ああいう時は適当にチーム名を言うてみたらええんと違うか？」

沢村「アタックスとか？」
盛り上がり出す。
坂田「それ小学校の頃の野球チームだろ？」
滝口「それで野球が始まるの？」
沢村「始まったら勝てるよ。あの人運動できなさそうだったし」
一郎「そうやな。あのチームとか言うてたヤツ、なで肩で貧弱で運動神経の悪いブサイクの補欠って感じやったもんな」
滝口、坂田、沢村、笑う。
先口「一っちゃん口悪いなー」
坂田「事実だよ事実！」
滝口「でも、喧嘩売る相手確実に間違えてるよね。俺達って全然ワルじゃないし」
一郎「目も悪いんと違うか」
滝口「ありえるね。あとギャルみたいな女の人が2人いたから格好つけたのかも」
沢村「あー。でも、あの人そんな事しても全然カッコ良くないから。逆！逆！」
一郎「ホンマやで。その女2人も妖怪砂かけ

ババアにそっくりやったしな」
滝口、坂田、沢村、笑う。
沢村「似てた！似てた！」
滝口「て言うかさ、さっきの人もう完全に笑いのネタじゃん」
全員で笑う。

○増田家の前（夜）
ミニバン、走って来ると停車する。
一郎、車から降りて家に戻る。
ミニバン、走り去って行く。

○一郎の部屋（夜）
一郎、ベットの上で横になりながら、スマートフォンを操作している。

○ミニバンの車内（夜）
沢村、運転している。
坂田、助手席に座っている。
スマートフォンが振動する音が響く。

後部座席に座っている滝口、スマートフォンを取りだし、画面を見る。
ニヤリとする。
滝口「一っちゃんのグループメール見た？」
沢村「何かあったの？」
滝口「一っちゃんの超能力でさっきのヤツのチーム名が解ったらしいよ」
沢村「何てチーム？」
滝口「華奢ブサイク同好会だって」
3人、笑う。
坂田「そのメール見てえ！」
と、ポケットに手を入れる。
坂田「あれ？」
滝口「どうしたの？」
坂田「スマホがない」
と、車の中を探す。
滝口「ある？」
坂田「いや、ない」
と、滝口と周囲を探す。

○喫茶店の駐車場（朝）
黒塗りの高級車、やって来て止まると、
大西正明（５８）、降りてくる。

○喫茶店・店内（朝）
和夫、大西、コーヒーが置かれたテーブルを挟んで向き合っている。
和夫「今月中に男で２０代の戸籍を４０ほど欲しいんだけど」
大西「前みたいな感じでいいかな？」
和夫「いや、しっかりとした戸籍が欲しいんだ。長く使えるというか、一生ものの」
大西「という事は日本国籍？」
和夫、頷く。
大西「それならちょっと時間がかかるなー」
和夫「どれぐらいかかる？」
大西「まだ解らないなー」
和夫「なら、それとは別に、それまでの間、別の物を用意してくれないか？」
大西「ああ大丈夫だけど……今回は一体？」

和夫、困った表情を浮かべる。
大西「いやいや、別にいいんだ」
和夫「悪いね。いろいろと変わった事が起こってさ」
大西「いえいえ、いつも社長さんには世話になってますから」
と、コーヒーを一口飲む。

○大学・キャンパス（朝）
一郎、西川、ベンチに座っている。
大林、その正面に立っている。
大林「多分、一っちゃんが眠ってる場所の次元が何らかの理由で歪んで、それが押入れの辺りまでズレるんだよ」
一郎「次元が歪んで俺が増えるなら、その場所に西川を置いてみたらどうや？」
西川「なんで俺が⁉」
大林「なら俺が一っちゃんの部屋に行ってその仮説を実証するのどう？」
一郎「それおもしろいな」

西川「大丈夫なのか？」
大林「解らないけど、この謎が解けたら、世紀の大発見だよ」
その時、一郎のポケットのスマートフォンが震動する。
一郎、スマートフォンを取り出す。
画面には『着信坂田』と表示されている。
スマートフォンを耳に当てる。
一郎「はいもしもし？」
赤穂の声「お前舐めた事言ってんじゃねえぞ」
一郎、考える表情を浮かべる。

○ファーストフード店・店内（夜）
一郎、坂田、滝口、テーブルを囲んで座っている。
滝口「俺にもかかってきた」
坂田「なんて答えた？」
滝口「声で昨日のチームのヤツって解ったか

ら、昔のバイト先の知り合いってだけ言ったら、突然切られた」
坂田、テーブルを握り拳で叩く。
坂田「あの野郎舐めてんな。でも何であいつ一っちゃんに怒ってんだ？」
滝口「多分、坂田の落とした携帯で、あの内容を見たんだよ」
坂田「華奢ブサイク同好会？」
と、ニヤリとする。
一郎「ただじゃ済まさんらしいわ」
坂田「上等じゃねえか！」
滝口「警察に電話した方がいいって」
坂田「いや、やってやろうぜ」
滝口「でもあの感じだと仲間もいるよ」
坂田「関係ないし数なんて。滝口スマホ！」
と、手を出す。
滝口「厄介ごとはごめんだよ」
坂田「大丈夫。非通知でかけるから。ほら！」
滝口、ため息を吐いてから、スマートフォンを渡す。

坂田、スマートフォンを受け取って、
画面を操作して、耳に当てる。
数秒が経過する。
坂田「おいコラ！」
と、顔を上下に動かす。
坂田「だったらなんだよこの野郎！上等じゃねえか！やってやるよ！」
滝口「坂田豹変し過ぎだし」
坂田「来いよこの野郎！」
と、スマートフォンを一郎に渡す。
坂田「かわれってさ」
一郎、受け取って耳に当てる。
一郎「はいもしもし……」
と、黙る。
坂田、滝口、一郎の顔をじっと見る。
一郎「そんな偉そうに言うなやー！」
坂田、笑って拍手をする。
滝口、困った様に額に手を当てる。
滝口「なんでこんなノリノリなの？」
一郎、嬉しそうに話し出す。

一郎「何がチームやねん！きもいんじゃー！」
坂田、スマートフォンに顔を近づける。
坂田「そうだこの野郎！てめぇきもいんだよ！」
一郎「お前きもいんじゃー！」
赤穂の声「てめぇら何人いんだよ！」
一郎「お前は何人やねん？」
赤穂の声「大宮連合だこの野郎！８人のチームの代表だ！文句あんのかコラ！」
一郎「たった８人で偉そうにすんなや」
坂田、拍手をして、一郎からスマートフォンを受け取る。
坂田「解ったかこの野郎！チームごとかかってこいよ！ぶっ潰してやるよ！」
と、スマートフォンを耳から離す。
坂田「一っちゃん！どこで決闘する？」
一郎「そうやな、あの焼肉屋の駐車場や」
坂田、スマートフォンを耳に当てる。
坂田「おいコラ！焼肉屋に来い！」
赤穂の声「焼肉屋じゃ解んねえだろうが！場

所とチーム言えよこの野郎！」
坂田「華奢ブサイク同好会だ！」
赤穂の声「この野郎！」
滝口、ため息を吐いて顔を左右に振る。
○ファーストフード店の外（夜）
一郎、坂田、滝口、店を背にして歩いている。
滝口「謝ったら済んだんじゃないの？」
坂田「向こうが喧嘩売ってきたんだよ。それに、ああいう奴らに謝るって事は金を取られるって事だよ」
滝口「じゃあ、決着をつけるの？」
坂田「当たり前だろ。喧嘩売ってきたのは向こうが先なんだよ」
滝口「ヤバくない？」
坂田「お前は来なくていいって。俺と一っちゃんで行って来るから」
滝口「本当に行くの？」
一郎「あいつ人のメールを勝手に見て金持っ

て土下座しに来いとか言うてくるねん」
滝口「そういうのは無視しといた方がいいよ」
一郎「来ないなら家に来るとか言うてくるねん。だから思い知らせたんねん」
坂田「さすが一っちゃん！滝口、もう戦いは始まってんだよ！」
滝口「それって、いつだっけ？」
坂田「今週の金曜日。チームのメンバー集めて焼き肉屋の駐車場でって」
滝口「本当にヤバいってそれ」
坂田「大丈夫だって。一っちゃんがいれば１０人力だから」
一郎、立ち止まる。坂田、滝口、合わせるように立ち止まって一郎を見る。
一郎「いや、今週の金曜日なら、２０人力や」
坂田、笑みを浮かべる。
坂田「言うね！」
滝口「なんか、一っちゃん本当に別人になったみたいに変わったよね」

坂田「俺達は昔から気合入ってんだよ」
滝口「坂田は昔からそんな感じだったけど、一っちゃんはそんな感じじゃなかったよ」
坂田「一っちゃんは男になったんだよ。お前も男になれよ」
滝口「俺はパソコンオタクのままでいいよ」
と、先に歩き出す。
坂田「情けねえ奴だなー」
と、大きなため息を吐く。

○増田家・一郎の部屋（夜）
スマートフォンの画面に、増田一郎２から８までの名前が並んで表示されている。
一郎の指が増田一郎２を押す。
一郎、スマートフォンを耳に当てる。
一郎２の声「なんや」
一郎「俺やけど俺か？」

○大学・図書室（朝）

大林、着席して宇宙の本を読んでいる。
ブラックホールの事が書かれている。
西川、別の場所に着席して、真剣な表情を浮かべてオカルト本を読んでいる。
本には、カッパの写真と説明文が書かれている。

○増田家・一郎の部屋（夕方）
一郎、扉を開けて入って来る。
大林、西川、続いて入って来る。
大林「ここか」
と、周囲を見渡す。
大林「で、一っちゃんが出てくる場所は？」
一郎、押入れを開ける。
一郎「ここや」
大林、押入れの中を入念に調べると、ポケットからメジャーを取り出す。
西川「何するの？」
大林「まずは距離を測る」

と、ベッドから押入れまでの距離を測る。

大林「2メーター11センチ」

と、紙にメモをする。

一郎「大林、リフォーム屋のおっさんみたいやな」

大林「そうかもね」

一郎「で、おっさんは何をしてるんや？」

大林「次元の歪みが原因なら、この距離や位置が重要になってくるんだ。場所によっては、自分の体が半分になってしまう可能性もあるからね」

一郎「それを試してみたらどうや？」

大林「人事だと思ってキツイ事言うね」

一郎「なら、増えた大林で実験すればええやんけ」

大林「残念だけど、俺の人格だと嫌がってやらないと思うよ」

と、カバンから電卓を取り出して数字を打ち込む。

○増田家・姉の部屋（夜）
電気が消えていて薄暗い。
一郎６人、西川、布団の上で並んで眠っている。

○一郎の部屋（夜）
電気が消えていて薄暗い。
大林、眠っている。

○増田家・外観（朝）
太陽に照らし出されている。

○一郎の部屋（朝）
大林、目を覚ます。
起き上がり周囲を見渡す。
押入れの元に向かい、扉を開ける。
中には誰もいない。
一郎２０、部屋の扉を開け中を覗く。
大林、一郎２０の方を向く。
大林「あっ、一っちゃん。今日は増えてない

みたいだよ」
一郎２０「いや、もう増えてもうてるわ」
大林「もう増えてる？」
一郎２０「俺が出て来てもうたわ」
大林「えっ、一っちゃんじゃないの？」
一郎２０「俺は一郎２０や」
大林、呆然と一郎２０を見る。

○滝口の部屋
滝口、机に座ってパソコンでインターネットをしている。
滝口「大変だ……」
と、呆然と固まる

○百貨店の野菜売り場
野菜売り場の服を着ている坂田、忙しそうにダンボールから野菜を取り出し棚に並べている。
坂田「はいーらっしゃいませー」
滝口、やって来る。

坂田「滝口！お前も男になったか！」
滝口「いや、違うんだよ。これ見て」
と、ポケットからプリントを取り出して坂田に渡す。
坂田、受け取る。
滝口「喧嘩相手の事調べたら、結構危ない連中だよ。傷害事件も起こしてる」
坂田、プリントを滝口に返す。
坂田「そんなの関係ないって！」
滝口「他のチームと抗争してる本格的なチームだよ。後ろにはヤクザがついてるって噂もあるみたいだし」
坂田「関係ねえっての！こういうのは気合なんだよ気合！」
と、より激しく作業を続ける。

○焼肉屋の駐車場（夜）
改造車が数台止まっている。
赤穂と仲間７人が集まっている。
赤穂「そいつらマジで俺らの事舐めてんだ

よ」

と、坂田のスマートフォンを見せる。

仲間Ａ、その画面を見る。

仲間Ａ「こいつら絶対ゆるさねえ！」

仲間Ｂ「なんて書いてたんだ？」

仲間Ａ「華奢ブサイク同好会だってよ」

仲間達、共感するように怒る。

型の古い高級車、入ってきて停車する。

仲間Ａ「あれって、塚本先輩の車じゃ……」

赤穂、不敵な笑みを浮かべる。

仲間Ｂ「こりゃ今日の夜は大事件だな」

と、赤穂と仲間達、大きな声で笑う。

塚本先輩（２４）、停車した型の古い高級車から降りて、赤穂達の元に歩いて来る。

赤穂「塚本先輩おはようございます！」

と、頭を下げる。

仲間達、同じように頭を下げる。

塚本先輩「ふっはっ！ははっ！」

と、笑みを浮かべ、焼けて黒くなった

歯を見せる。

○百貨店の野菜売り場の倉庫（夜）

作業着姿の坂田、スマートフォンを耳に当てている。

坂田「一っちゃん悪いんだけどさ、今日残業で行けないんだ。別の日にしようぜ」

一郎の声「俺はもう全員で向ってる所や」

坂田「全員って、あいつらも来たの？」

一郎の声「いや、全部俺や」

坂田、数秒黙ると、感心する表情を浮かべて顔を振る。

○焼肉屋の駐車場（夜）

赤穂、仲間達、塚本先輩、金属バットを持って集まっている。

仲間C「そいつらどこのチームっすか？」

赤穂「チーム名言わねーんだよ」

塚本先輩「とりあえずやっちまってから吐かせりゃいいだろ」

出入り口の方で、金属バットが地面に落ちて大きな音が響く。
赤穂、仲間達、塚本先輩、その音の方向を見る。
その先には、仲間Ｄ、出入り口の方を見て呆然としている。その先から、一郎２０人、歩いて近づいて来る。
仲間Ａ「何だアイツらっ⁉」
仲間Ｂ「ぜっ、全員同じ顔してるぞっ！」
と、後ずさりする。
一郎２０人、赤穂達の元へ歩いて近づいて来る。
赤穂「きっ……気持ち悪りっ……」
一郎２０人、突然立ち止まり赤穂を見る。
一郎「お前の方がきもいんじゃー！」
一郎５「きもいんじゃー！」
一郎２「お前きーもいんじゃー！」
と、一郎達、それぞれが「きもいんじゃー」と言う言葉を発する。

赤穂、仲間達、塚本先輩、怯える。
一郎２０人、黙ると、再び前進する。
塚本先輩「あんなヤバイ連中相手に喧嘩する
なんてお前馬鹿だろ！」
と、型の古い高級車の方へ逃げて行く。
仲間Ｃ「っっ、塚本先輩がビビってる……」
赤穂、仲間達、自分達の車の方に逃げ
出す。

○赤穂の車の車内（夜）
赤穂、車に乗り込んでくる。
エンジンをかけようとするが、手が震
えて鍵を床に落とす。
床を覗き込み必死で探す。

○焼肉屋の駐車場（夜）
停車している赤穂の車。
周囲の改造車、急発進して駐車場から
走り去って行く。

○赤穂の車の車内（夜）

運転席の赤穂、床に落ちている鍵を見つけると、拾って起き上がる。

一郎２０人が周囲を囲み、窓の外から赤穂を見ている。

赤穂、驚いて悲鳴を上げて飛び上がる。

一郎３「きもいんじゃー！」

と、一郎達、一斉に「きもいんじゃー」

という言葉をバラバラに発する。

赤穂「あっあぁぁぁぁぁぁ！」

と、両耳を塞いで、目を閉じ、座席の下に隠れる。しばらくそのままの常態でい続ける。

目を開け、ゆっくりと耳から手を離す。

静まり返っている。

そっと起き上がり、窓の外を見る。

一郎２０人、車を囲んで中を覗いている。

一郎７「きもいんじゃー！」

と、一郎達、一斉に赤穂の車を手のひ

らで叩き出す。

一郎１５「きもいんじゃー！」

一郎６「きーもいんじゃー！」

と、一郎達、「きもいんじゃー」と叫びだす。

赤穂「すすすすすっ、すっ、すすすすすす、すいますすすっ！すっ、すすすすすっ！」

と、震える両手を合わせて怯えながら謝る。

○焼肉屋の出入り口（夜）

赤穂の車、ライトをつけずに、猛スピードで道路へ出て走り去って行く。

○増田家の玄関（朝）

一郎、和夫、末子の靴と、新品の靴５足が並んでいる。

和夫の声「さあ行こうか」

一郎５人、和夫、やって来ると、靴を履いて外に出て行く。

○増田家の外（朝）
停車している白い高級車、エンジンがかかると、走り去って行く。

○ファーストフード店・外観
青空の下、太陽に照らし出されている。

○ファーストフード店の中
一郎、坂田、並んで座っている。
沢村、滝口、その正面に座っている。

沢村「じゃあ、一っちゃんが勝ったの？」
一郎「完全に勝ったわ。あのチームチーム言うてたヤツ、すすすすすとか言うて逃げて行きおったわ」
沢村、滝口、呆然と顔を合わせる。
坂田、得意げな表情を浮かべる。
坂田「滝口、解ったか？相手がどんなヤツらで何人いても勝てんだよ。なー一っちゃん」
一郎「まあ、あいつらが俺と戦うなら３倍の

数が必要やったわ」
坂田、感心して嬉しそうな表情を浮かべる。
一郎、水を飲む。
滝口「それで、坂田のスマートフォンは？」
一郎、コップを置く。
一郎「忘れてたわ」

○増田家の玄関（夕方）
和夫と末子の靴と、少し古い白い靴が置かれている。
一郎、扉を開けて戻って来る。

○増田家のリビング（夕方）
一郎、入って来る。
一郎２１と一郎１３、座っている。
一郎「なんで今日は２人おるんや？」
末子、台所から出てくる。
末子「お父さんがみんなを寮に送ったら、この一郎は帰りたいって。仕事が合わなかっ

たみたいなの」
一郎「そういう事か」
一郎１３「そういう事や」
一郎「そらしゃあないわ」
と、部屋から出て行く。

○一郎の部屋（夕方）
一郎、机に座ると、スマートフォンが鳴り出す。
画面には『着信坂田』と表示されている。
一郎「チームのヤツか？」
と、スマートフォンを耳に当てる。
一郎「もしもし、前のすすすすの奴か？」
辰巳の声「俺は辰巳って者だ」
一郎「なんや、あのすすすすと違う奴か？」
辰巳の声「そいつは俺が面倒見てる赤穂って奴なんだけど、アンタに怯えてんだ。それで話したい事がある」
一郎「話したい事？」

と、そのまま黙る。

○喫茶店の駐車場

黒い高級車がやって来て止まる。

○黒い高級車の車内

運転席に黒い服と茶色いサングラス姿で座っている辰巳正雄（３７）、スマートフォンを耳に当てている。

辰巳「そうか、解った。待っててくれ」

と、スマートフォンを胸ポケットに入れると、助手席を見る。

細身で気弱そうな宮路健四郎（４４）、暗い表情で助手席に座っている。

辰巳「もう中にいるらしいです」

宮路、暗い表情で小刻みに頷く。

○喫茶店の前

辰巳、宮路、歩いて来ると、喫茶店の扉を開けて中に入って行く。

○喫茶店・店内

一郎２２人で満員になっている。

辰巳、入り口の前で、一郎達を見て呆然としている。

宮路、その隣から、険しい表情で一郎達を見ている。

辰巳「信じられねえ……」

と、一郎達を見渡し、一郎１０を見る。

辰巳「あっ、あんただな？」

一郎１０「自分は違いますわ」

辰巳、驚いた表情のまま一郎１８を見る。

一郎１８「自分も違いますわ」

辰巳、一郎５を見る。

一郎５「自分も違いますわ」

一郎、前の席が３つ開いている席から、手を上げる。

一郎「僕ですわ」

辰巳「あっ、ああ……そうか……」

○喫茶店の外

窓ガラスから、うっすらと一郎だらけの店内が見える。

○喫茶店・店内

辰巳、宮路、一郎達２２人に囲まれながら、一郎と向かい合って座っている。

辰巳「電話で話した通り、俺が面倒見てる後輩から、全く同じ姿をした集団に襲われたって連絡を受けたんだ。それで、思い当たる事があってな」

と、宮地を腕で示す。

宮路、姿勢を変えて、前のめりになる。

宮路「実は、僕も君と同じように、自分が何人もいるんだ」

一郎「そうなんですか」

宮路、深刻な表情で頷く。

宮路「1日1人ずつ増えているのかい？」

一郎「はい」

宮路「今どういう状態だい？」

一郎「今日で２２人の記録を達成しました」
宮路「じゃあまだ減っていないのか……」
一郎「減ってない？」
宮路「僕は毎日１人ずつ減っているんだ」
一郎「増えた後は減るんですか？」
宮路、重々しく頷く。
宮路「僕は一時期、３００人を超えていた。だけどその頃を境に数が減りだして、今日で残り５人……」
宮路、泣きそうな顔で視線を落とす。
店内が静まり返る。
辰巳胸ポケットから坂田のスマートフォンを取り出し、一郎に渡す。
辰巳「とりあえず、何か解った時の為に、連絡先の交換でもしとくか」
と、坂田のスマートフォンを一郎に渡す。

○電車内
一郎２２人、一人のお婆さんを間に挟

んで並んで座っている。

○増田家・２階の廊下（夜）

一郎４人、並んで窓の外を見ている。

○情報処理室

大林、パソコンと向かい合っている。

西川、やって来ると大林のパソコン画面をのぞき込む。

検索の枠に、『人　増え続ける　減りだす　消える』と表示されている。

西川「減るって何？」

大林「一っちゃんが消えてしまうかもしれないんだ」

西川「え？」

と、眉を潜める。

○情報処理室の外

学生達、次から次へと外に出てくる。

○情報処理室

大林、西川、並んでパソコンと向かい合っている。

周囲の学生達、席を立って部屋から徐々に出て行く。

西川「授業の時間か。大林どうする？」

大林「どうするも何も、一っちゃんが消えてしまうかもしれない状態じゃ授業どころじゃないよ」

西川「そうだよな」

と、大林とパソコンに向かい合って、キーボード入力をして情報を探す。

一郎、外に出るように近くを通過して行く。

西川「あっ、一っちゃん」

一郎、立ち止る。

一郎「おう」

大林「一っちゃんいたんだ」

西川「隣に座る？一っちゃんも調べるだろ？」

一郎「いや、授業あるからええわ」
と、扉の外に出て行く。
西川「授業って……」
大林「一っちゃんらしいよ」
西川「でも、ちょっといい加減過ぎない？自分の事だよ？」
大林「だからさ。自分が減りだして、最後には消えてしまうかもしれないんだ。そんな状態で、恐ろしい情報を探し続けられると思う？」
西川「そっかー。そうだよな。俺だったら怖くて調べる事もできないよ」
大林「だからこういう時は俺達が動かないと」
と、画面を見てキーボードを打ち込む。

○大学の教室・６２３号室
一郎、生徒達、座っている。
正面に教師、立っている。
教授「はい。フランス語の授業を始めます。まず出席をとります」

と、生徒の名前を呼ぶ。
返事をしていく生徒達。

○情報処理室
大林、西川、同じ画面を見ている。
一郎、部屋に入って来ると、西川の隣に座って、パソコンの電源をつける。
西川「あっ、一っちゃん。大丈夫？」
一郎「何がや？」
大林「ここは俺達に任せて、無理しなくてもいいんだよ」
一郎「何を言うてるんや？」
西川「何って、ここから出て行った理由があるだろ？」
一郎「フランス語の教師は始まったら生徒の名前を呼ぶんや。その時に返事しとかなアカンやんけ」
西川、呆然とする。
大林、安心したように息を吐く。

○トイレの中

西川、大林、並んでようを足している。

西川「信じられないよ。俺達が一っちゃんの事調べてるのに、一っちゃん、全然関係ない事調べてた……」

大林「そう言えば、高校に入学した時の一っちゃんって、すごいビビりだったんだろ？」

西川「ああ。心配性で何でも考え込む感じだったよ」

大林「人って変わるんだなー。なんでだろう」

と、考え込むように黙る。

○駅（夕方）

一郎、西川、駅で電車を待っている。

中年の男、一郎の元に歩いて来る。

中年の男「ソウ君じゃん！」

一郎「ああ、どうも」

中年の男「ソウ君の言ってた通りだったよ。８番１着。何で８番が来るって解ったの？」

一郎「ただの勘ですよ」
中年の男「馬券買ってたら大穴だったよ」
一郎「惜しい事しましたね。で、どうでした？」
中年の男「負けた。１１番５着！今度こそ勝ってやる。そしたらおごってやるよ」
一郎「勝つまでやる感じですね」
中年の男「だな。それじゃまた！」
と、手を上げて去って行く。
西川「誰？」
一郎「知らん」
西川「え？じゃあ何？ソウ君って誰？」
一郎、スマートフォンを操作する。
画面には、一郎７（ソウ）という文字。
一郎「一郎７の知り合いみたいやわ」
アナウンスが流れ電車がやってくる。

○増田家・台所（朝）
一郎６人、食事をしている。

○大学の教室・４２３号室（朝）

西川、落ち込んだようにうつむいて座っている。

大林、その隣で、考える表情を浮かべて座っている。

一郎、教室に入って来ると、大林の隣に座る。

一郎「なんや、その暗い顔は？」

大林「一っちゃん、大変な事が起こったよ。これを見て」

と、スマートフォンの画面を見せる。

画面には、西川が２人、無表情に台所に座っている姿が映っている。

一郎「お前も増えだしたんか？」

西川「朝起きて台所に行ったら……俺がもう１人いて、飯を食ってた……。あと、家の庭に大きな穴ができてた」

一郎「なんやそれ」

大林「一っちゃんの家の近くには？」

一郎「そんなんないわ」

大林「じゃあ、その穴は一体……」
一郎「そうや、この前の人に聞いてみたるわ」
大林「前に言ってた減り出した人？」
一郎「何か解るかも知れへん」
と、ポケットからスマートフォンを取り出し操作する。
スマートフォンの画面に『宮路（減ってるおっさん）』という文字が現れる。
一郎の指がそれを押す。
一郎、スマートフォンを耳に当てる。
一郎「あかんは。出えへんわ」
大林「なら、俺達が行って調べよう」
西川、更に不安そうな表情を浮かべる。

○ホームセンター店内・工具品コーナー
カゴの乗った台車を押している大林を先頭に、一郎、西川、やって来る。
大林、スコップを取ってカゴの中に入れる。

○ホームセンター店内・お菓子売り場

スコップが入っているカゴが乗った台車を押している大林を先頭に、一郎、西川、やって来る。

大林、カステラの箱を取りカゴの中に入れる。

一郎「なんやそれ？」

大林「もしだよ。もし西川の言ってたように穴の中に地底人がいたら、これが役に立つ」

一郎「なるほどな。でも、地底人なら釣り用のミミズとかの方がええんとちゃうか？」

大林「それもありえるね」

と、探すように周囲を見渡す。

○ホームセンターの駐車場

駐車している高級車のトランクが開いている。

一郎と西川が見ている前で、大林、台車のカゴに入っているスコップとハ

ンマーをトランクの中に入れる。
カゴの中のお菓子を取る。
大林「で、これはこっちだな」
と、お菓子を片手にトランクを閉める。
西川「やっぱり中に入るのやめない？何がいるか解らないし、もし地底人がいたら…
…」
大林「大丈夫だってこれがあるんだから」
と、カステラのお菓子を見せる。
西川「なんで知りもしない地底人をいい奴らだって決め付けるんだ？」
大林「西川だって、悪い奴らだって決め付けてるじゃん」
西川「異星人とは違って、いい内容が一つもなかったんだ」
大林「それオカルト本でしょ」
西川、すねるように、空のカゴが乗った台車を押して、ホームセンターの方へ歩いて行き、姿が見えなくなる。
少しすると、車と人がぶつかる大きな

音が響く。

○ホームセンターの前

店内への出入口前の通路。

ミニバンの正面に、西川とカゴと台車が地面に倒れている。

運転手、ミニバンから降りてくる。

運転手「危ないじゃないか！」

と、西川に駆け寄る。

運転手「大丈夫か？」

西川「あっ、足がちょっと痛いです」

大林、一郎、やって来る。

大林「大丈夫か西川⁉」

と、西川の元に駆け寄る。

○病院の一室（夕方）

西川、ベットの上で足をギプスで固定されている。

大林、一郎、ベットの横に立っている。

西川「最悪の日だよ。自分は増えるし、事故に

は合うし、変な穴はできてるし……」
と、ため息を吐く。
大林「本当、不運続きだな」
西川「でも、これで家に帰らずに済んだけど……」
一郎「えらい運のええヤツやな」
大林、笑いそうになり口を手で押さえる。

○高級車の車内（夕方）
大林、運転している。
一郎、助手席に座っている。
大林「気が動転してたんだろうね」
一郎「あいつは気が弱すぎるわ」
大林「だから俺達がやるしかない」
一郎「ん？」
大林「明日、２人で西川の家に行こう」
と、目を輝かせて一郎を見て頷く。

○増田家の台所（朝）

一郎６人、食事をしている。
末子、食器を洗っている。
和夫、やって来る。
和夫「ん？」
と、一郎達を見て眉を潜める。
末子、和夫の方を向く。
末子「そうなの。今日は増えてないの」
和夫「増えてない……」
と、呆然とする。

○高級車の車内（朝）
大林、運転している。
一郎、座席を倒して寛いでいる。
大林「増えるのが止まった？」
一郎「減ってるおっさんに電話して聞いてみようと思ったけど、出えへんねん」
大林「その人にも何かあったんじゃない？」
一郎「そう思って、そのおっさんを俺に紹介したヤクザみたいなんに聞いたわ」
大林「何て言ってたの？」

一郎「調べとく言うてたわ」
大林「何が起こってるんだろう……」
と、考えるように黙り込む。

○増田家のリビング
一郎５人、寝たり、座ったりと思い思いの姿勢で寛いでいる。
末子、棚の前に椅子を持って来ると、その上に乗る。
棚の上に置かれている大きな花瓶の下に、年賀状と書かれたダンボールの箱がある。
末子「あったあった」
と、花瓶を持ちあげると、手がすべる。
末子「あっ！」
テレビを見て座っている一郎２４の頭に、花瓶が落ちてきて割れる。
一郎２４、そのまま倒れる。
末子「大変！」
４人の一郎達、倒れた一郎を見る。

○西川の家の前

高級車が横付けされている。

一郎、大林、インターフォンの前に立っている。

西川２の声「どちらさまですか？」

大林「大林です」

西川２、扉を開ける。

西川２「おう、一っちゃんに大林！」

西川２の後に見える玄関の中に、西川３、松葉杖を付いて脚にギプスをして立っている。

○西川家の庭

茂みの中に見える大きな穴。

大林、スコップとカステラを持って立っている。

その横に、一郎、西川２、松葉杖をついて立っている西川３。

一郎「これが運のええ男がビビってた穴か」

大林「この中に答えがある」

西川３「本当に行くの？何が起こるか解らないよ」
大林「その時はこれがあるって言っただろ」
と、カステラのお菓子を見せ不敵な笑みを浮かべる。

○穴の中
大林、片手にスコップ、もう片方の手にスマートフォンを握り、その光を照明にして進んで行く。
一郎、西川２、続く。
少し進むと、行き止まりになっている。
大林「なんだ。何もないよ」
西川２、安心するように一息吐く。

○西川家の庭
西川３、松葉杖をついて待っている。
西川２、一郎、大林、穴の中から出てくる。
西川３「どっ、どうだった？」

一郎「人食い地底人がおったわ」
西川３、顔を硬直させる。
大林「違うよ。何もなかった」
西川３、安心するように一息吐く。
西川３「脅かさないでよ。でも、なんでこんな穴が？」
大林「わからない。でも、これは自然にできた穴には見えないよ」
西川２、西川３、顔を合わせて不安そうな表情を浮かべる。

○増田家のリビング（夕方）
一郎４人、寛いでいる。
末子、座っている。
玄関の扉の開く音がする。
一郎、足音と共にやって来る。
末子「あっ、一郎。大変なの。一郎が怪我をして入院したわ」
一郎２３「何者かに花瓶を頭にぶつけられたんや」

末子「違うわ。手が滑って落としちゃったの」
と、心配そうな表情をする。

○増田家の台所（夜）
一郎５人、和夫、座っている。
末子、食事の準備をしている。
和夫「そうかー。で、怪我の状態は？」
末子「頭を１０針と、額を５針縫う怪我をしちゃって、それで入院する事になったの」
和夫「命に別条はないんだろ？」
末子、頷く。
和夫「なら一安心だ」
末子「でも、先生の話だと額の傷は残るって」
一郎「これで見分けがつきやすくなるわ」
末子「またそんな酷い事言って」
一郎「俺の事を俺がどう言うてもええんや。俺も俺と同じ事を言うわ」
一郎２３「俺も言いかけとったわ」
一郎２１「俺もやわ」
末子「ああそう。確かに一郎ならそうかもね」

と、呆れた表情を浮かべる。
スマートフォンがポケットの中で震動する音がする。
一郎、取り出して見る。
画面に『着信辰巳』と表示されている。
一郎、廊下へ出て行く。

○増田家の廊下（夜）
一郎、スマートフォンを耳に当てる。
一郎「はい」
辰巳の声「兄ちゃんか。大変だ。宮路さんが行方不明になってる」

○増田家の台所（朝）
末子、一郎５人、座って朝食を食べている。
和夫、入って来る。
和夫「今日も一郎は増えてないな」
家の電話が鳴り響く。
和夫「こんな時間に誰だろう？」

末子、リビングの方へ行き、少しする
と戻って来る。
末子「大変よ」
和夫「大変？まさか一郎に何かあったのか？」
末子「病院から連絡があってね、一郎がいな
くなったみたいなの」
和夫「注射が怖くて逃げだしたんだ」
末子「きっとそれよ」
一郎「俺なら逃げるけど、今回は消えたんと
違うか」
末子「そんなおかしな事がある訳ないでし
ょ」
和夫「いや、でも一郎は増えたぞ」
末子、不安そうな表情になる。

○大学・学生食堂
一郎、大林、向き合って座っている。
大林「病院の一っちゃんが行方不明に？」
一郎「多分、消えてしまったんやわ。そのう
ち俺も消えてまうわ」

大林「その事について考えたんだけどさ、元からいる方は消えないんじゃないかな？」
一郎「あのおっさんは行方不明になったらしいで」
大林「まさか、前に言ってた増えた人？」
一郎「そうや」
大林、考えるように黙り込む。

○大学・キャンパス
大林、ベンチに座ってスマートフォンを耳に当てている。
大林「そうなんだよ。何が起こってるのか全く解らないよ。え？思い当たる事？」
と、真剣な表情で黙る。
大林「またその話⁉」
と、呆れた表情になる。
大林「あっそー。うん。あー、別にいいよ。まあ、暇つぶしはなると思うよ。解った。じゃあ。はいはい」
と、スマートフォンをポケットに入れ、

ため息を吐く。
大林「まったく……」
と、立ち上がり、校舎の方へ向かう。

○大学・一階の廊下
食堂へ入って行く学生達。
大林、歩いて来ると、向かい側にある
図書室に入って行く。

○大学の図書室・比較文化コーナー
大林、棚に並ぶ本を見ている。
その中に、オカルト本が1巻から5巻
まで並んでいる。
大林「なんでこんなものが」
と、3巻から5巻を取って離れて行く。

○西川の家の前(夕方)
停車している高級車。
大林、柿の入った袋を片手に西川家の
扉を開けて出て来る。

開いた扉から、西川数子（４８）、大林を見送る様に出て来る。

数子「わざわざありがとうね」

大林「いえいえ、西川君によろしく言っておいてください」

と、高級車に乗り込む。

高級車、走り去って行く。

○瀧川家・外観（夜）

２階の窓の電気が消える。

○増田家の台所（朝）

末子、呆然と一郎達を見て座っている。

一郎４人、座って食事を食べている。

１人分の席が空いていて、その前の朝食が置かれたままになっている。

和夫、眠たそうに入って来る。

和夫「うん？一郎はまだ起きてないのか？」

末子「それが、いなくなったの」

和夫「え？トイレじゃないのか？」

末子「探したんだけど、どこにもいないの」
和夫「一郎は一郎を見なかったのか？」
一郎２２「起きた時にはもうおらんかったわ」
一郎「やっぱり消えてしまったんやわ」
一郎２２、食べながら小刻みに頷く。

○病院

西川、ベッドの上で足を固定された状態で座り、オカルト本を読んでいる。
数子、横に座っている。
数子「本当、そんな本を大学生になってから読み出すなんて、思いもしなかったわ」
西川「これはちゃんとした本だよ」
数子「それにしても、わざわざ家にまでこんな本を届けに来てくれるなんて、優しい友達ねー」
西川「大林はこの本の展開を聞きたいんだ」
数子「あの子なら自分で読むわよ」
と、立ち上がる。
末子「ちょっと売店に行って来るけど、何か

飲み物いる？」
西川、集中して本を読んでいる。
○増田家の台所（夜）
一郎２人、和夫、末子、コーヒーが置かれたテーブルに座っている。
末子「今日もやっぱり一郎は減ったのね」
和夫「減ってた。これで寮にいる一郎が６人いなくなったよ」
末子「そう。仕事に差し支えは？」
和夫「今はまだ代わりの人に任せてなんとかなってるけど、これ以上減っていくと……」
と、鼻からため息を吐いてコーヒーを一口飲む。
和夫「そう言えば、一郎と同じ寮に住んでる人が言ってたんだけど、消えた一郎が前日の夜に外に出て行く姿を見たらしい」
末子「それで、どこに行ったの？」
和夫「そこまでしか情報はないんだ」

末子「じゃあ、消えてるんじゃなくて、どこかに行ってるの？」
和夫「多分ね。ただ、酒癖の悪い人が言ってる事だから、あんまり信用できないよ」
末子、困ったように小刻みに数度頷く。

○病院（朝）
西川、目の下にクマを作ってオカルト本を読み終え、本を閉じる。
置かれている３巻、４巻の上に、５巻を積むように置く。
杖を使って、ベッドから窓の元に行く。
険しい表情で遠くを見る。
机の上のスマートフォンが振動する。

○大学のキャンパス（朝）
大林、スマートフォンを耳に当てて、掲示板の前に立っている。
大林「もしもし西川？俺だけど、あの本さ、返却期限が切れてんだよね。で、今日取り

に行ってもいい？……じゃあ今日行くよ。
え？ああ、いいよ。解った。じゃあ」
と、スマートフォンをポケットに入れて、その場を去る。

○病院

西川、険しい表情でベッドの上で横になっている。
大林、袋に入った本を手に入って来る。
西川、大林に気づく。
西川「おお！大林！」
と、起き上がる。
大林「西川大丈夫か？また入院するなんて」
西川「俺はずっと入院したままだよ」
大林「え？お前の家で会っただろ？」
西川「俺に会ったの？」
大林「前に穴を調べに行った時だよ」
西川「そっか……」
と、暗い表情を浮かべる。
大林「もしかして……」

西川「ああ。それは増えた方の俺だよ」
大林「でも、西川のお母さんはそんな事言ってなかったよ。増えたのは1人だけだって」
西川「俺を心配させないように事実を隠してるんだ。でも俺はもう全部解ってる。これに全て書いてた」
と、机の上にあるオカルト本を取って、大林に渡す。
大林「まだこの本信じてたんだ。じゃあ。続きはこれでよかった？」
と、袋に入っているオカルト本の新刊西川に渡す。
西川「助かるよ。ありがとう」
と、急いで本を読み始める。
大林、本を読みだした西川を見て呆然とする。
西川、大林に気づく。
西川「あっ、悪い。ちょっと集中させてくれ。何か解ったらすぐに報告するから」
と、本を真剣に読む。

大林「はいはい」
と、呆れた表情を浮かべて、無言で出て行く。

○６階建ての寮の前（夜）
照明を消した高級車が止まっている。

○高級車の車内（夜）
運転席に大林、助手席に一郎、座っている。
フロントガラスから６階建ての寮の出入口が見える。
一郎１２、寮の扉から出て来る。
大林「出て来た！」
と、隠れるように一郎と身をかがめる。
一郎１２、車の前を通り過ぎる。

○国道（夜）
一郎１２、歩行車道を歩いている。
大林、一郎、一郎１２を尾行している。

一郎１２、突然、全力疾走で走り出す。
大林、一郎、追いかけるように全力で走り出す。

○住宅街（夜）
一郎１２、全力疾走で角から曲って来ると、そのまま走り去って行く。
大林、一郎、かなり遅れて、息を切らしながら、角を曲がってやって来る。
立ち止まって周囲を見渡す。
大林「あれ⁉いない！」
一郎「なんかここ、見覚えのある街並みやな」
大林「あっ、ここ、西川の家の近くだ」
と、一郎と顔を合わせる。

○大学のキャンパス（朝）
大林、ベンチの上で眠っている。
一郎、やって来ると大林を見下ろす。
一郎「おいおっさん」
大林、目を開ける。

大林「いっ、一っちゃん」
一郎「なんでこんな場所で寝てんねん？」
　大林、つらそうに起き上がる。
大林「３日連続で一っちゃんを尾行してた」
一郎「土日もやったんか。で、どうやった？」
大林「あの日と同じ。成果なしだよ」
　と、疲れたように目を閉じて、鼻から深く息をする。

○大学の図書室
　大林、棚の裏で横になって眠っている。ポケットの中のスマートフォンが震動する。
　眠たそうにスマートフォンを取り出して、耳に当てる。
大林「はい」
西川の声「大変だ。地球が危ない！」
　大林、吹き出すように笑ってから、眠たそうにため息を吐く。
大林「悪いけど、俺は今日疲れてるんだ」

西川の声「何かあったの⁉」
大林「何がって、ただ夜遅くまで増えた方の
一っちゃんを尾行してただけだよ」
西川の声「じゃあもう見たのか？」
大林「見たって何を？」
西川の声「その一っちゃんが、俺の家の庭に
ある穴から地下に行く所を」
大林「西川の家の庭……」
と、目が覚めたように起き上がる。
大林「どういう事？」
と、さえた表情を浮かべる。

○病院
西川、オカルト本を片手に広げている。
大林、西川の正面に座っている。
西川「冷静に聞いてくれ。冷静に。いいか」
大林、真剣な表情で頷く。
西川「地底には恐ろしい地底人がいる」
大林、呆れたように呆然とする。
西川「彼らはミミズを全滅させようとしてる

んだ」

大林、無表情のまま、数秒動かない。

大林「え？」

西川「地下から地上へ上ってくるエネルギーを破壊すれば、野菜がなくなる」

大林、少し真剣な表情になる。

西川「野菜がなくなれば、それを必要とする動物もいなくなる。俺達のエネルギー源が消えてしまうんだ」

大林「何の為にそんな事するんだよ？」

西川「これを俺達に食べさせたいんだ」

と、オカルト本の中身を見せる。

本には、芋虫の体に、額に米と書かれた人間の顔がついていて、体中にウジ虫が湧いている生き物の絵が描かれている。

大林「きっ、気持ちわりぃー」

西川「地底人も食べないゲテモノだよ。これを売りつけたいんだ。それで、俺達は数年以内に、これしか食べる物がなくなる」

大林「地底人が食糧を支配するって事？」
西川「だから俺達人類は地底人の奴隷にならざるえない。ならなければこれを食べられなくなって、餓死させられるんだ」
大林「ちょっと気持ち悪いね……。でも、なんでそんな事をするんだよ？」
西川「戻って来るんだ」
大林「何が？」
西川「地底人が」
大林「え？」
西川「地底人は元々地上に住んでた人間なんだ。追いやられて地下に逃げた。その後、進化しながら地下深くに潜って行って、その過度で高度な文明を作り出したんだ」
大林「じゃあ地下で暮らせばいいじゃないか」
西川「もう限界がきてる」
大林「限界？」
西川「このまま地下で太陽の光を浴びずにいると、死滅するか、モグラ人間になってしまう状態なんだ」

大林「退化……してるの？」
西川、頷く。
大林「まあ、それは、それでかわいそうだね……」
西川「彼らは地上に出て、地上の人間と混血しないと絶滅してしまうんだ」
大林「じゃあ、俺達と混血する為に地上を支配するかしか選択肢はないの？」
西川、頷く。
大林「そんな事しなくても、話し合えば仲良くなれるじゃん。元々地上に住んでたんでしょ？」
西川「地上を憎んでいて、文化が違うのに自分達の考えを押し付けてきて、馬にそっくりで臭くても仲良くなれる？」
大林「そっ、そんな風貌で臭いの？」
西川、唾を飲むようにゆっくりと頷く。
大林、考えるように困った表情を浮かべてから、西川を見て顔を振る。
西川「やさしいお前でもそうだろ。他の人達

はどうすると思う？」
大林「関わらないか、排除するかも」
西川「そうなんだ。それに、地底人は元々排除されていた人々だから、俺達を憎んでる。最初から話し合う気なんかないんだ」
大林、不安そうに黙り込む。
西川「だけど防げるかもしれない。人間を増やす技術の開発に成功して、その人間を地下に送って対処を始めてる」
大林「それ、やっぱりオカルト本じゃん！」
西川「対処しているのが異星人って聞いても、オカルトだと思う？」
大林「よけいにオカルトじゃん！人類がやってるならまだわかるよ。なんで異星人が地球の地下の為に動くんだよ？距離はなれ過ぎだし」
西川、困った表情を浮かべ、視線を逸らして斜め下を向く。
西川「そこが解らないんだ」
大林「なんだそりゃ」

西川「多分、来月号か、再来月号に詳しく書かれると思う。ただ、複製した人間を送り込む事で、地底人を止める事ができるのは事実だよ」
大林「でもさ、そんな技術があるのに、人の家で人を増やすなんておかしいでしょ」
西川「人間だって魚の養殖を家ではできないだろ。それと同じなんだ」
と、オカルト本のパッケージを見せる。
西川「このシリーズはオカルト本に見せてるだけで、現実を報告してるんだ」
と、大林に渡す。
大林、オカルト本を見る。
地底人殺しの青ミミズ男という文字と共に、小柄な青年が描かれている。
大林「地底人殺しの青ミミズ男って……」
西川「読めば解る」
と、真剣な表情で大林を見て深く頷く。

○病院の駐車場

大林、オカルト本を片手に、止まっている高級車に乗り込む。
高級車、走り去って行く。

○大林の部屋（夜）
大林、椅子に座ってオカルト本を開く。
大林Ｎ「青ミミズウィルスは、単体では非常に感染力の弱い病原菌でしかない。しかし、人間に感染し、免疫物質と混ざり合う事で、地底人に対してはボツリヌス菌の１兆４千億倍の毒素を持つ非常に強力な有害物質に変化する。人がその病原菌に感染すると、不安感が消えさり、ノリノリになる」
大林、笑う。
本を閉じ、困ったように目を瞑る。
時計を見ると７時。
視線を時計からそらして、数秒考えるように黙る。
もう一度本を開いて中を見る。
目次が見える。

大林N「機関銃のような耳を持った毛虫女に
気をつけろ」
大林、吹き出すように笑う。

○大林家外観（朝）
3階建ての豪邸。
太陽に照らされている。

○大林の部屋（朝）
目の下にクマができている大林、真剣
に本を読んでいる。
その本を閉じる。
大林「大変だ……」
と、顔を上げる。

○病院の駐車場
西川、松葉杖を突いて立っている。
高級車、そこにやって来て停車する。

○高級車の車内

大林、運転席に座っている。
後ろの窓から、開いたトランクを閉める西川の姿が見える。
松葉杖を持っていない西川、片足飛びでやって来ると、助手席に乗り込む。
大林「西川、この本は何者かに気づかれないように事実を伝えてるんだな」
西川、大林を見て、ゆっくりと頷く。
大林、困ったように一息吐いて、正面を向く。
大林「って事は……圧倒的な兵力不足……。これから一体、どうなるんだ……」
西川「山に行くぞ」
大林「山？」
西川「何度も読まないと解らないけど、最新刊には隠れた暗号が書かれてたんだ。その山の頂上に、この本の著者がいる」
大林「中西幸雄さんが⁉」
西川「とりあえず車を出して」
大林、運転を始める。

○病院の駐車場

高級車、走り出し駐車場から出て行く。

○高級車の車内

窓からは国道の風景が見える。

大林、運転している。

西川、助手席に座っている。

○高速道路

高級車、走っている。

○田舎の道路（夕方）

高級車、走っている。

○峠道（夜）

高級車、街灯がない薄暗く曲がりくねった道を上っている。

○獣道の前（夜）

舗装された道路がなくなる。

高級車、走ってくると停車する。
大林、西川、高級車から降りる。

○獣道（夜）
雑草の生えた薄暗い獣道。
大林、西川を担いで進んで行く。
担がれている西川、松葉杖を持ってスマートフォンの照明で周囲を照らしている。

○山頂（夜）
雑草の生えた平地になっている。
大林、松葉杖をついた西川、スマートフォンの光で周囲を照らしながら歩いていると、テントが見えてくる。
立ち止る。
大林「本当にあった……」
と、テントの前に向かおうとする。
西川、大林を止めるように手を出し、
1人で進み、テントの前に立つ。

大林、黙って見ている。
西川、演歌のように歌いだす。
西川「人がー、増えたらー、地下にーもぐりだすねー、夏もー、冬もー、モグラーのようにしてー、あああああー、島の地下はー、ああー、隣の陸の地下もー」
テントの中で人が動き、出入り口の前に人影が現れる。
西川「ああー」
中西の声「広い陸地に行く季節ー、ああー」
西川「そこはダメな季節ー、ああー」
中西の声「ここのー」
西川「きせーえーつーうー」
静まり返る。
頭がハゲている中西勇雄（５５）、険しい表情で、中から勢い良くテントのチャックを開け、覗くように西川を睨む。
西川、同じように中西を睨む。
中西「ああー、ここからー」
西川「見えーてー」

中西「きー」
と、西川と一緒に、間を開けてから、
「たー」と響き渡るような大きな声を
出す。
大林、口を開けて、呆れた表情を浮か
べて呆然としている。
中西、素早く小さく頷く。
中西「こっちだ」
と、テントの中に招く。
大林、西川、テントの中に入る。

○テントの中（夜）
中西、奥に座る。
西川、大林、中西の正面に座る。
中西「君達がここに来た理由は分かった」
大林「教えてください。一体、何が起こって
いるんですか？」
中西「どの辺りから聞きたいんだい？」
大林「増やした人の数が足りていないと」
中西「なるほど。君たちは今の状況を打開す

る為に来たんだな」
大林「はい」
中西「なら、答えは簡単だ。我々にできる事は何もない」
西川「ない……」
大林「それじゃあ納得できないです。詳しく教えてください」
中西「いいかい、これは地上を乗っ取ろうとしている地底人と、それを防ぎ宇宙の環境を守ろうとする異星人の闘いだ。私達には何もできない」
大林「せめて、今の状態だけでも詳しく教えてください！」
中西、少し考えるように黙る。
中西「シルベスタ・スタローン博士というイタリアの科学者がいた」
中西、大林、同時に「シルベスタ・スタローン？」と声を出す。
中西、うなずく。

○山頂（夜）

テントが立っている。

中西の声「スタローン博士は潔癖症で清潔好きで有名だった。家にはチリ一つ落ちていない。それなのに、ある日、家に１匹のネズミが現れた。普通なら、ネズミを駆除しようとする。だがスタローン博士は違った。虫１匹すら殺せない性格と、清潔好きという性格から、家を綺麗にして、ネズミを自然消滅させようとしたんだ。だが、ネズミは増えていき、１年で３６５匹になった」

西川の声「一日一匹ずつ増えてる……」

中西の声「そうだ。その事に疑問を持ったスタローン博士は、ネズミをよく観察した。すると、全てのネズミの特徴が全く同一である事に気づいた」

西川の声「繁殖ではなかったんだ……」

中西の声「そこで、ある研究機関にそのネズミを調べさせた。すると、この地球上には存在しないＤＮＡを持った未知のウイル

スが発見された。感染率は１００万匹に１匹。人なら１００万人に１人。ある条件下で強い感染率を持つと思われ、特定の場所、地域、位置で多く見られる。感染すると、感染先の体内から、小さなダニのような生物が作り出される。それが皮膚を食いちぎり外に出て、数時間で脱皮すると羽の付いた成虫となり、暗く安全な場所を見つけだす。そこで細胞分裂を繰り返し巨大化する。結果、感染先の母体と全く同じ姿形になる。感染者の体内の菌が死滅するタイミングで、本来の性質である、強過ぎる性欲が現れ始める」

〇テントの中

中西、大林と西川と向かい合って座っている。

大林「性欲？」

中西「そう、一定の期間で成人になり、現れるようになっている。それが略奪や強姦、

破壊行為、殺人を繰り返す兵器としての原動力だ。全員が猟奇殺人鬼となり、暴れまわる」
大林「なんか、残虐だな……」
西川「それぐらいでないと、地底人を倒せないよ」
大林「でも、どうやって地下に？」
中西「それは解らないが、おそらく、本能的な習性を利用して、地下に向かうエレベーターのある場所に向かわせているんだろう。」
大林「なるほど。でも、今の状態は数が少なくなって兵力不足じゃ……」
中西「いや、兵器の人口は減ってはいない」
大林「なら、どうして兵力不足と？」
中西「地底人は地上より遅れているとは言っても、文明を持っている。当然、知能もある。つまり、地底で犯罪を起こし暴れまわっている人物達が、同じ顔、同じ姿をしていて、何人もいる。さらに服装が地底人と

は明らかに違う事で、その存在に気づいたんだ。結果、地底人は異星人の殺人兵器を見つけたら襲撃をするようになった」

西川「それで兵力不足に……」

中西「１００万人に１人を、１日につき１人ずつでは、数が少な過ぎる。地底人はこの日本の地下だけでも３千万人。すぐにやられてしまう。勝ち目はない。おそらく、５年以内にミミズは地球から消えるだろう」

西川「地上が地底人の物になってしまう……」

大林「でも、地底人を倒す強力なウイルスが地上にはあるんじゃないですか⁉」

中西「それはこれまで、たった一例しか確認できていない伝説だよ」

大林「伝説……」

西川、大林、落ち込んだように黙る。

中西、２人を見て少し笑う。

中西「なぜそんな顔をするんだ？これはただのオカルトの物語だよ」

大林「中西さんは、増えた人を見た事ないん

ですか？」
中西、笑う。
中西「当然だよ」
西川「僕の友人と、僕は増えだしました」
中西「なんだって⁉」
と、西川と大林を見て動揺する。
中西「冗談だろう？」
西川、ポケットからスマートフォンを取り出し、中西に画面を見せる。
中西、画面を見て驚く。
中西「まさか、そんな事が本当に起こるとは……本当だったんだ……」
大林「あっ、あの、どういう事ですか？」
中西、大林の肩を握る。
中西「早く身を隠すんだ！」
大林「身を隠すって、誰からですか？」
中西「地底人の殺しの部隊が地上に上がってきているという噂がある！詳しく説明している時間はない」
大林「でも……」

中西「いいか、小柄で頭の丸い連中には気をつけろ。注意して見れば見分けはつく！」

西川、大林、困った様に顔を合せてから、中西を見る。

中西「見つかったら終わりだ」

大林「あの、もう少し詳しく教えてください」

中西「次に発売される本にもう書いてある。とにかく隠れるんだ。早く！」

大林「でも、それを聞かないと」

中西「いいから早く！歴史は繰り返される！」

と、怒ったように２人を押し出す。

○山頂（夜）

大林、西川、中西にテントの中から追い出される。

テントのチャックが勢い良く締められる。中から物を動かしている音が聞こえてくる。

大林、西川、テントから離れて行く。

○獣道の前（夜）

高級車、方向転換して走り去って行く。

○高級車の車内（夜）

大林、運転している。

西川、助手席に座っている。

西川「隠れろって言ってたけど、誰からだろう。それに、増えた事を聞いて驚いてた」

大林「よく解らないけど、とりあえず、もう少し事態が理解できるまでは隠れておいた方がいいよ」

西川、無言で数回頷く。

○大学・キャンパス（朝）

一郎、歩いて来る。

大林、一郎を見つけて手を振る。

大林「一っちゃん、話があるんだ」

一郎「何や？」

大林「増える理由が分かったよ。あと、もっと重要な事も」

一郎「ええわ」
大林「え⁉」
一郎「これから出席や」
　　と、離れて行く。
大林「ちょ、ちょっとまって一っちゃん！」
　　と、後を追う。

○食堂

　　学生達、にぎやかに食事をしている。
　　一郎、大林、向かい合って座っている。
一郎「そういう事やったんか。それで俺まで誰かに狙われてしまうんか」
大林「だから、全ての一っちゃんが姿を消すまでは隠れておいてほしいんだ」
一郎「別にええけど、俺の出席はどうすんねん？」
　　大林、少し笑うようにため息を吐く。
大林「一っちゃんらしいよ。俺が取っとくよ」
　　一郎、カバンの中から、時間割を取り出して大林に渡す。

一郎「学生番号は３０１１１４や」
　大林、それをメモする。
大林「解った。じゃあ一っちゃん、早く行って」
一郎「もう行くんか？」
大林「頼むから、早く」
　一郎、ため息をつく。
一郎「しゃーないなー。じゃあ頼むわ」
　と、立ち上がり、その場を後にする。

○増田家の台所
　和夫、スマートフォンを耳に当てている。
　末子、隣にいる。
和夫「駄目だ。一郎に電話が繋がらない」
　と、スマートフォンを耳から離す。
末子「じゃあ、今日で一郎が１人に戻ったのね。でも、そうだと明日はどうなるんだろう」
和夫「大丈夫さ。一郎は消えないよ」

末子「そうだといいけど」
和夫「消えた一郎は、突然出てきた一郎なんだから。突然消えても不思議はないさ。今いる一郎は、昔からずっといる一郎なんだ。心配ないよ」
末子「そうね」
と、不安そうに頷く。
玄関の扉が開く音がする。
一郎、入って来る。
和夫「今日は早いな」
一郎「そうや」
和夫「体調とか問題ないな？」
一郎「なんでや？」
和夫、末子と顔を合わせてから、一郎を見る。
和夫「実はな、今日で増えた一郎が全て消えたんだ」
一郎「なんや、もう今日で終わってたんか。まあ、ちょうどええわ」
和夫「ちょうどいい？」

一郎「うまくごまかして、今日から連休の始まりや」
と、部屋から出て行く。
和夫「一体、一郎は何を言ってるんだ？」
と、不思議そうな表情を浮かべる。

○大学の教室・６２３号室
教授、正面に立っている。
席に座っている大林、生徒達。
教授、生徒達の名前を１０名程呼ぶ。
教授「大林さん」
大林「はい」
教授、さらに５名の名前を呼ぶ。
教授「増田さん」
大林「はい」
大林の近くに座っている生徒Ａ、何かに気づいたように大林を見る。

○一郎の部屋（夜）
真っ暗な部屋の中。

時計の針が１２時を指している。
階段を登る足音が近づいて来る。
眠っている一郎、目を覚ます。
廊下を歩く音が聞こえてくる。
一郎、起き上がると、扉を開けて外を覗く。

○増田家の台所（朝）
末子、一人で不安そうに座っている。
和夫、やって来る。
和夫「一郎は？」
末子「まだ来てないの」
和夫、時計を見る。
末子「普段だったらもう起きてる時間だけど」
和夫「まさか、消えたりしてないだろうな？」
と、末子と急いで台所から出て行く。

○２階の廊下（朝）
和夫、末子、階段を登って来ると、一郎の部屋の扉をノックする。

和夫「おーい、起きてるかー？」
返答がない。
和夫、ドアを開けて中を見て黙り込む。
末子「どうしたの？」
和夫、呆然とした表情で末子を見る。
和夫「きっ、消えてる……」
末子「え⁉」
と、驚いた表情をする。
隣の部屋の扉が開く。
一郎２４、前髪を下ろして額が見えない姿で出てくる。
和夫、一郎２４の方に視線を向ける。
和夫「なんだ、いたのか」
末子、振り返るように一郎２４の方を見て、一息つく。
末子「今日はそっちで寝てたのね」
一郎２４「妖怪鬼クソババアの妹の中古部屋は相変わらずやわ」
と、階段を下りて行く。
和夫、末子、顔を見合わせ、安心する

ように肩をなで下ろす。

○大学の教室・６２１号室（朝）

大林、入って来る。

一郎２４、座っている。

大林「一っちゃん！」

と、駆け寄る。

一郎２４「おう、お前か」

大林「なんで来たの？」

一郎２４「何の事や？」

大林「何の事って……あっ、そっか。もう一っちゃん１人に戻ったんだ」

窓から風が吹き、一郎２４の髪が動く。

額についている治りかけの深い傷が見える。

大林、その傷を見て呆然とする。

一郎２４の髪が元に戻り、額が隠れる。

○大学・キャンパス（朝）

大林、スマートフォンを耳に当ててい

る。
大林「西川！」
西川の声「なんだよ大きな声を出して？」
大林「今日で一っちゃんが１人に戻ったんだけど、今学校で会った一っちゃん、何か変なんだ」
西川の声「変って、何が違うんだ？」
大林「ずっと前についたような大きな傷跡が額についてる」
西川の声「なんで額に……」
電話が突然切れる。
大林「あれ、もしもし？もしもし？」
と、諦めるようにスマートフォンを耳から離す。

○高速道路
高級車、右車線を駆け抜けて行く。
その先に山が見える。

○獣道の前

高級車、停車する。
大林、高級車から降りると、獣道を走って進む。

○山頂
大林、走ってやって来ると、呆然と立ち止まる。
大林「テントがない……」
と、周囲を探す。

○病院（夕方）
西川、ベッドに座っている。
大林、入って来る。
大林「西川！」
と、西川の目の前にやって来る。
西川「中西さんのテントがなかったって？」
大林「もう何が起こってるのかさっぱりだよ」
西川、黙って考える表情を浮かべる。
西川「何者かを警戒して隠れたのかな。それとも」

大林「それとも？」
西川「地底人側の人だったのかもって」
大林「じゃあ、あの本は増えている人をおびき寄せる為の罠？」
西川「兵力不足と言っても、地底人には増えている人間は脅威だよ」
大林「まさか……」
と、大林と黙り込む。
大林「一っちゃんに何が起こったんだろう」
西川「こうなったら、あの穴の中を調べるしかない」
大林「西川の家の庭の穴」
西川、怖がりながら小刻みに頷く。
大林「よし、西川、行こう」
大林、松葉杖の西川、部屋から出て行く。

○道路（夜）
高級車、猛スピードで走って行く。

○穴の中（夜）

大林、片手にカステラと照明にするスマートフォン、もう片方の手にハンマーを持って、松葉杖の西川と歩いている。

西川「前よりも長くない？」

大林「確かに」

進んでいくと、奥に土の色をした鉄のような扉がある。

大林、西川、その前で立ち止まる。

西川「こっ、これが地下に繋がるエレベータの扉……」

大林「この先に答えがある」

と、開けようとするが開かない。

大林、カステラとスマートフォンを西川に渡す。

ハンマーを両手で握って扉を叩く。

大きな音が響き渡るが、扉はびくともしない。もう一度叩く。

○西川家の庭（夜）

穴の中から、ハンマーで金属を叩く大きな音が何度も響き渡る。

○穴の中（夜）

大林、ハンマーを使って何度も扉を叩いている。

それを見ている西川。

西川修三（５２）、後ろから歩いて来る。

修三「何をしているんだ？」

大林、西川、振り返る。

西川「親父！」

大林「この中に友人がいるかもしれないんです」

修三「ああ、彼らの知り合いだったのか」

西川「知り合いって、何があったの？」

修三「昨日の夜、若い３人の男が庭に入って来たんだ」

西川「３人？」

修三「色白の男と双子だ」

西川「双子の方は一っちゃんじゃ？」
大林「その双子の特徴解りますか？」
修三「双子の方の一人は額に傷があって私服だったなー」
大林「間違いなく一っちゃんだ」
修三「もう一人の方は柔道着を着ていて、竹刀とヘルメットを持っていたな」
西川「しっ、竹刀とヘルメットって……」
修三「庭の方から音がしたから行ってみたら、その3人がいたんだ。泥棒と思ったから声を出したら、どこかに行ってしまったよ」
西川「じゃあ、一っちゃんは地下じゃないのかな……」
修三「それで、朝になると、また外で音がしたんだ。いつもやって来る新しい隆史なら松葉杖の音がするんだが、その時はしなかったから見に行ったんだ。そしたら、双子の1人が庭から出て行く姿が見えた」
大林「大変だ……やっぱり一っちゃんは地下に……」

修三、眉を潜める。
修三「どうしたんだ？それに、これは一体何なんだ？」
西川「大林、それだけじゃないぞ。今の傷のある一っちゃん、性欲で動く方だ……」
大林「だと、地上で何をしだすか解らない……」
西川、頭を抱えて黙り込む。
修三「うん？何だ？何だ何だ？」
と、不思議そうに大林と西川を見ている。

○大学の校門前（朝）
アメリカンフットボール用のヘルメットとプロテクターを装着し、こん棒を持っている大林、入ってくる学生達を見張るように立っている。
学生達、大林を見ながら、次から次へと入って行く。
一郎２４、遠くから歩いて来る。

大林、道をふさぐように前に立つ。
一郎２４「なんやねん一体？」
大林「話を聞きたいんだ」
一郎、嫌そうな表情を見せる。

○学生食堂（朝）
重武装の大林、一郎２４と机を挟んで向い合って座っている。
一郎２４「なんや、そんなジロジロ俺を見て」
大林「本物の一っちゃんはどこにいるの？」
一郎２４「地下に行ってもうたんや」
大林「それだけじゃわからないよ。何が起こってるの？その傷は何なの？何をしたの？」
一郎２４「なんや、その犯罪者に取り調べする刑事みたいな態度は？」
大林「教えてほしいんだ！」
一郎２４、わざとらしい大きなため息を吐く。
一郎２４「これは花瓶が頭に落ちてきた傷や」

大林「花瓶？」
一郎２４「それで入院したんや。でも俺はすぐ岡本の家に移動したわ」
大林「注射が怖くて？」
一郎２４「当たり前やないか」
大林「じゃあ、なんでそこから地下に行かなかったの⁉」
一郎２４「お前も知ってるんやろ。変なのが地下におるって」
大林「それは一っちゃんから聞いたの？」
一郎２４「そうや。なんでそんな変なのがおる所に行かなあかんねん」
大林「抑えきれない性欲が湧いてきただろ？」
一郎２４、気持ち悪そうに大林を見る。
一郎２４「何を言うてんねんや？」
大林「性欲は出てないんだ……」
一郎２４「そんなんないわ」
大林「じゃあなんで３人で地下に行ったんだよ？」
近くの女子学生達、大林と一郎を面白

そうに見る。
一郎２４「怪我も治って元気になったから家に帰ったんや。そしたら一郎が出て来て、みんな地下に行ったからお前も行ってこいやとか言うてくるんや」
大林「なんで行かなかったんだよ！」
一郎２４「さっき言った通り、変なんがおるからや」
大林「それでどうなったの？」
一郎２４「そんなん言うならお前が行ったらええやないか、変な連中撮影してきたら金になるでって言うたんや」
大林「何て事言うんだ！それじゃ本物の一っちゃんが地底人にやられてしまうじゃないか！」
と、困ったように視線を逸らす。
大林「今のノリノリの一っちゃんなら、間違いなく地下に行ってしまうよ……」
と、肩を落とす。
一郎２４「ドキュメンタリー撮影する言うて

たわ」

大林「何考えてんだ一っちゃんは……」

と、涙ぐんで呆れた表情を浮かべる

歯を食いしばり握りこぶしを作る。

大林「クソッ！」

と、こん棒で机を叩く。

一郎２４、周囲の生徒達、その音に驚く。

一郎２４「なんやねんいきなり。ビックリするやないか」

と、不満そうに大林を横目で見る。

〇大学・キャンパス

重武装の大林、ヘルメットを片手に持って、スマートフォンを耳に当てている。

大林「そうなんだ。多分、頭を打った事で性欲から生まれる暴力性は消えたみたい。うん。ただ、一っちゃんが……」

と、泣くのをこらえるように黙る。

○図書室

普通の格好に戻った大林、頭を抱えて、黙って下を向いて座っている。

何かを思い出したように顔を上げる。

大林「そうだ、今日だ」

と、立ち上がって足早に外に出て行く。

○大きな本屋の駐車場

高級車、入って来ると停車する。

大林、高級車を降りて、本屋の方へ向かう。

○大きな本屋

大林、オカルト本のコーナーにやって来て棚を見る。

1巻から7巻まで並んでいる。

大林「あった」

と、7巻を手に取って、離れて行く。

○高級車の車内

本を読んでいる大林。
しばらくすると、本から視線を離し、正面を向いて呆然とする。
大林「そういう事だったのか。となると、一っちゃんは……」
と、動かなくなる。

○病院
西川、ベッドに座っている。
オカルト本を手に持っている大林、ゆっくりと入って来ると、西川の横に座る。
西川「一っちゃんは？」
大林、オカルト本を西川に渡す。
西川「第７巻……何が書かれていたんだ⁉」
大林「このオカルト本に書かれている事は今の事じゃないらしい」
西川「今の事じゃない？」
大林「２００年以上も前に起こった出来事らしいんだ」

西川「２００年前？」
と、オカルト本の本をめくる。
そこに、髪の毛がフサフサの中西の若い頃の写真が写っている。
西川「これは誰？まさか中西さん？」
大林「昔は歴史学者だった。それを調べてると、異星人の存在に気づいた」
西川「それが何なんだ？一っちゃんは地底人が待ち構えている地下に行ったんだよ！」
大林「２００年前に勝ってるんだよ。それから今日まで地球は支配されてない」
西川「だからなんなんだよ？」
大林「中西さんは、歴史は繰り返すって言ってただろ。だから、もう一度穴に行こう」
西川、黙って大林を見ている。

○西川の家の前
高級車、停車する。
大林、松葉杖の西川、車から降りる。
大林、高級車のトランクの元に行く。

トランクを開けお土産のカステラを取り出す。

西川「なんでそんな物を？」

大林、西川を見て不敵な笑みを浮かべる。

○穴の中

片手に照明のスマホ、もう片手にお土産のカステラを持った大林、松葉杖をついた西川、入って来て扉の前に立つ。西川、扉を開けようとするが、開かない。松葉づえで叩くが、びくともしない。

西川、ため息を吐いて肩を落とす。

西川「俺達はどうしたらいいんだ……。一っちゃん、何考えてんだよ」

大林「何も考えてないよ。前だって自分が増えてるのに得意げでノリノリだっただろ」

西川「それがどれだけ危険な事か……、考えてくれないと。本能じゃないんだから……」

大林、少し笑みを浮かべる。
西川、大林を見て不快な表情になる。
西川「なんだよその顔は？一っちゃんが地底人にやられるって状態なのに、その顔は何なんだよ！」
大林「今の言葉だよ」
西川「今の言葉？」
大林「一っちゃんと仲良くし過ぎて、当たり前になってる。でも、外から見ると普通じゃないよ」
西川「何言ってんだ？」
大林「今までの一っちゃんの事を思い出してみてよ。怖いモノ知らずだっただろ。それで地底人がいるって解ってるのに、ノリノリで行ってしまった」
西川、眉を潜める。
大林「普通の感覚じゃないけど、頭がおかしい訳でもない。だとしたら？」
と、嬉しそうな表情で、西川と１０秒間、顔を見合う。

西川、何かに気づいた表情をする。
西川「もしかして」
大林、さらに嬉しそうにする。
大林「そうだよ。自分が増えた時、本当なら怖いはずだよ。なのにノリノリだった。あれが普通だと思う？」
西川「って事は、もうその時には」
大林、勢い良く深く頷く。
大林「間違いない。青ミミズの卵をどこかで食べて感染してる」
西川「そうだ！自分が消えてしまうかもしれない状態でも、平気な顔してフランス語の出席を取りに行ってた！」
大林「高校１年の時、初めて一っちゃんと会った時、すごく大人しかったのは？」
と、西川と嬉しそうに顔を見合う。
西川「感染前だよな！それ！」
大林「それが高校２年の時には、怖いもの知らずの一っちゃんになってた」
西川「感染してる！青ミミズ菌に感染してる

！という事は、今の一っちゃんは……」
大林、深くうなずく。
大林「地底人殺しの」
と、西川、声をそろえる「青ミミズ男！」
大林、西川、ゆっくりと扉の方を見る。
西川「大林、可能性が見えてきたな」
大林「ああ」
西川「俺達にできる事は、一っちゃんが地底人を滅ぼして、この扉から戻って来るのを待つ事だろ？」
大林「その為にここに来たんだよ。もうすぐ、一っちゃんが出て来る。そしたら、みんなでこれを食べるんだ」
と、得意げにカステラのお土産を見せ、笑みを浮かべる。
西川「今頃、病原菌と寄生虫を、本人も気づかない間に地底にばら撒いてる！これで地底人は絶滅して、地上の野菜は救われる。そうだよな⁉」
大林「ああ。だからこれからも、俺達異星人

はこの地上で安泰だ」

西川「うん」

と、頷くと、すぐに驚いたように大林を見る。

西川「え？」

大林、扉を見て嬉しそうな笑みを浮かべている。

西川、呆然と驚いた表情で大林を見続ける。

○西川家の外（夜）

停車している高級車、走り去って行く。

○穴の中（夜）

暗闇と静けさに包まれている。

エレベーターが上がって来る音がする。チンという音がすると、扉の開く音が響く。

そこから、２人の足音が近づいて来る。

一郎の声「ホンマなんやねんあの連中」

滝口の声「みんな着物を着てたね」
一郎の声「問題は別や」
滝口の声「あっ……。その事は気にしなくてもいいよ」
一郎の声「気にするわ。俺が臭いんか！」
滝口の声「いや、臭くないし一っちゃんは悪くないよ」
一郎の声「いや、みんなお前には普通やった」
滝口の声「多分、服に使ってる洗剤とか、整髪料が合わなかったんだよきっと」
一郎の声「違うわ。あのちょんまげのおっさんも、ド派手な服装で高い靴履いた女も」
滝口の声「花魁そっくりな人ね」
一朗の声「そうや。みんな俺に近づいたら、臭そうに倒れおった」
滝口の声「うっ……うん……そうだね……」
静けさの中、足音だけが離れて行く。
一郎の声「きもいんじゃー！」
その声がこだました後、静けさに包まれる。

終わり